（城西人文研究第20巻第2号）

【研究ノート】

嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解（四）

黄色瑞華

凡例

一　本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』（所収句八二三、他に俳諧歌一八）の全注解である。

一　一行めに『一茶発句集』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に（　）に入れて注した。

一　二行め以下に、㊀として、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。

一　句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。

一　語注は、簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。

一　各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。

一　注釈史上、看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者名及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峯『名句評釈』」のように略記した。詳しくは稿末の「参考文献」を参照されたい。

一茶発句集

春の部（承前）

苦の娑婆や花が開けばひらくとて

㊀ 八番日記（文政2・10）・だん袋・自筆句集・文政版発句集

▽ だん袋、「吉原三日花」と前書して、「こちとらも目の正月ぞさくら花」とともにこの句出。自筆句集、上五・中七「苦〔の〕娑婆や花〔が〕開けば」。浅黄空、前書「大悲奉納」。「苦〔の〕娑婆や桜〔が〕咲ばさいた迚」。

解　せわしないこの世は、桜が咲けば咲いたとて落着かないことだ、の意。

さる人は病気をつかふ花見かな

㊀ 嘉永版発句集初出

解　せっかく花見にさそったのに、仮病を使ってことわられてしまった、というのである。

新吉原

行灯ではやしたてるや花の雲

㊀ 文政版発句集

▽　八番日記（文政3・2）、上五・中七「桃灯ではてし立けり」。
解　桜の季節、新吉原も桃灯を並べつるして、いっそうはなやいでいる、の意。

御所にて

棒突が腮でをしへる桜かな

㊀　浅黄空・自筆句集・文政版発句集
▽　浅黄空、前書「御所」。上五「棒〔突〕が」。自筆句集、前書なし。七番日記（文化12年の末尾に、「寛政元ヨリ文化六年迄」として）、前書「御所三月三日」。中七以下「腮でをしゆる」。
注　「棒突」、六尺棒を突きながら、御所の警固に当たる者。
解　御所の警固に当たる男は、あのあたりの桜が見ごろだ、といわんばかりに腮を突き出した、の意。その権柄なさまをおかしむのである。

桜へと見えてじん〳〵ばしより哉

㊀　七番日記（文化15・9）・八番日記（文政2・1）・おらが春・浅黄空・文政版発句集
▽　七番日記・八番日記・おらが春・浅黄空、中七「見へてじん〳〵」。八番日記、座五「端折かな」。おらが春・浅黄空、座五「端折哉」。おらが春、この句の上白に「ツボサウゾクハ、ウハギハ上衣ノツマヲハサミタル姿也。今云カイドリハシヨリノサマ也。玉カヅラニツボヲリ姿ト云々」と注を付してある。
注　「じん〳〵端折」、「爺端折」の音便形。着物の背縫いの裾をつまみ上げ、帯の下にはさみ込むことをいう。
解　花見にでも出かけるのだろう、「ぢん〳〵端折」の年寄りが調子のよい足どりで行くよ、の意。
▼　川島『新釈』に、「おのづから野趣が溢れて居る。（中略）『桜へと見えて』とある上八字が、じんじん端折の人物を現

すために実にしつくりとして居る。江戸なれば上野へとか向島へとか云うところであるが、たゞ『桜へ』と云つてあるので、派手な花見の行楽の地ではなく、一寸した花の名所か名木でも指して行くのであることが思はれる。折目のついた手織布子に新しい手拭でもさげて、じん〴〵端折して少し前屈みに急いで行く老爺。それを見送つて居る農夫の姿なぞも眼に見えるやうである」。黒沢『研究』に、「この句は花見の叙景でありまして、どこか野の中か、山の麓に桜の名所がある。そこへ花見の人が出掛けてゆくところを詠じたものです。（中略）此句はこのまゝ一つの絵になるやうな視覚的印象が強くあります。全体としてみても一茶の特徴が表はされて居り、部分的にも措辞として思ひ切つてじん〴〵端折といふ俗語を用ひて、対者の輪廓をはつきりとさせて来る点などは何としても彼の老熟さを認めねばなりません」。勝峯『評釈おらが春』に、「春着の裾をきちんと端折つて、ゆつくり歩いて行く後ろ姿は、この田舎に用事あつて来た人でない。花見だ。あの人たちには遠出の花だ。じん〴〵端折は急ぎ足には、裾がからんで邪魔だからやるのだが、あの足取のゆるやかさ。暢気な姿である。折角のさくらまで辿るあいだに、提げて持つ瓢箪が空にならねばいゝ」。中島『小林一茶集』に、「花見に行くと見えて、尻からげで浮き浮きと歩いてゆくよ」。

一本は桜もちけり娑婆の役

㊀　文化六年句日記（6・3）・希杖本句集・文政版発句集

▽　文化六年句日記、座五「娑婆（の）役」。

注　「娑婆の役」、「娑婆の役目」ではなく、名主・庄屋などと称される「娑婆の役」にある人、の意に解すべきであろう。

解　さすが「娑婆の役」に就く人の家、立派な桜を持っているよ、の意。

此やうな来世を桜だらけ哉

㊀　七番日記（文化11・2）・ほまち畑（文化11・2）・斗囿あて書簡（文化11・3・24付）・株番・随斎筆紀・自筆句集・文政版発句集

▽　自筆句集、中七「来世〔を〕桜」。希杖本句集、上五「此やうに」。

解　こんな末法の世でも、桜は安楽国を思わせるように、その花で地上をおおっているよ、の意。

人声にほつとしたやら夕ざくら

㊀　七番日記（文化11・2）・自筆句集・希杖本句集・文政版発句集

▽　希杖本句集、前書「群つゝ人の来るのみぞと西上人叱り給ひぬ」。浅黄空、前書「木母寺夕暮」。座五「ちる桜」。

解　人声にほっとしたのだろうか、はらりとひとひら桜の花びらが舞い降りた、の意。

気に入た桜のかげもなかりけり

㊀　三韓人（文化11・冬至日序）・句稿消息・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集・文政版発句集

▽　三韓人、前書「三月十日此辺の山ぶみして」。発句鈔追加、前書「三月十日古郷の辺りの山踏して」。希杖本句集、上五「思ふやうな」。

解　桜の季節、気ばらしにと思って山へ出かけてみた。だが、気の休まるような「花のかげ」もなかった、の意。この年の二月二十一日、生家を異母弟と折半。冷たい周囲の目を意識してのことであろう。

▼　句稿消息、成美の評に「おもひしまゝの山里もがなとねがはれ候。兼好法師の心にもおもひ合せ候」。

花守や夜は汝が八重ざくら

㊀　稿本発句題叢（文政3以前）

解　日が暮れて花見客の姿も見えなくなった。さあ、これからが「花守」自身のために咲いた桜だ、の意。

袖たけの初花桜咲にけり

㊀ 文化句帳（文化1・2＝重出）・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解　ようやく人の袖たけほどに伸びた桜。それがはじめての花をつけたよ、の意。

山桜皮を剝れて咲にけり

㊀ 句稿消息（文化11）

▽ 句稿消息、墨にて抹消してある。

解　皮を剝がれた山桜。それでもちらほらと花をつけているよ、の意。

傘にべたりと付し桜かな

㊀ 句稿消息（文化10）

▽ 七番日記（文化10・3）、中七以下「べたり〳〵と桜哉」。

解　散った桜の花びらが、雨傘の上に「べたり」とくっついている。我春集の序文で、観念的・通俗的誹諧を批判、実感を重んじる新しい俳諧を主張し、株番で、自身の俳諧に徹することを宣言した一茶は、積極的にこのような題材を求めた。結果的には、詩歌の伝統に背を向けることにもなった。

▼ 句稿消息、成美の評に「上々吉」。

天からでも降たるやうに桜かな

㊀ 株番（文化9・2）・文政句帳（文政5・閏1）

▽ 文政九・十年句帳写（文政9）・希杖本句集、上五・中七「天からも降たるやうな」。

解　桜の花びらを敷きつめたように、地面がその花びらで染められている。まるで、極楽浄土からでも降ってきたようだ、の意。「三奉請（さんぶじょう）」の「奉請弥陀如来、入道場、散華楽。奉請釈迦如来、入道場、散華楽。奉請十方如来、入道場、散華楽。」

に思い寄せたものであろう。

けふは町隣なる麻美と、前の日より釣(約)し置けるに、かれさはりありとて翌の命待ものかはと、たゞひとり来たりしに、幸、懐に五元集といふものゝあれば、これ究竟の句相手なり。

桜〳〵と唄はれし老木かな

㊐　八番日記（文政2・2、3＝重出）・李園あて書簡（文政2・2・15付）・おらが春・文政版発句集

▽　八番日記・書簡・おらが春、前文なし。文政版発句集、この文・句の間に後出「小坊主や」の句をはさむ。なお、この前文は「花見の記」（文化5・3）の一部が混入したもの。「花見の記」では、この文に「小坊主や松にかくれて山桜」（其角）と、後出の「小坊主や親の供して山桜」を付す。

注　「桜〳〵と唄はれし」、長唄「娘道成寺」などの文句「さくら〳〵と唄はれて」をふまえる。

解　これが、桜々ともてはやされた有名な桜なのか。すっかり老木になって、花の数も少ない、の意。

▼　黒沢『研究』に、「今までさくら〳〵と人に唄はれて来た老木だわいと現在の感じを詠んだものであります。人間の一生も斯くの如く今昔の相違を起すと云う意味に考へてみればよいでせう、そしてこゝまで到つた桜木の老を一茶は自分の主観に摂取してなつかしんでゐるか凝視してゐるかでなければならぬのです」。勝峯『評釈おらが春』に、「これがあの咲いた、咲いた、桜が咲いた。と、人を慰め、浮かれ、囃させたその一本とは信ぜられないでないか。唄はれしの下に『果(はて)が この』を補つて見ると、『老木哉』に無量の感慨が託されてゐることを知る。娘道成寺の『さくら〳〵と唄はれて』の文句なども、一茶の記憶裡に閃いてゐたかもしれない」。川島『おらが春新解』に、「『これも騒がれた桜だったが』と、樹齢尽きて漸衰していく老樹に対する感慨があるが、実は歌曲から得た上十二音が作者の興味の的だったのである。『浅ましの老木桜や翌の日に倒るゝまでも花のさく哉　文化十年』など、盛者必衰の姿をあらわそうとしてさまざまに試みているうちに、この『さくら〳〵』を記憶の中によびさましたのであったろう。長唄の『娘道成寺』（宝暦三年作曲）及び『手習子』（寛政四年作曲）に『さくらさくらと唄われて』とある」。

一夜さに桜はさゝらぼさらかな

㊐　浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽　浅黄空、前書「夜来風雨声」。浅黄空・自筆句集とも、上五の表記「一夜に」。

注　「さゝら」、だいなしになった物のたとえ。「ぼさら」、脱穀の際の稲穂のくず。ここでは、「さゝらぼさら」で、すっかりだいなしになってしまったことをいう。

解　一夜大荒れに荒れて、満開の桜はすっかりだいなしになってしまった、の意。

下〳〵に生れて夜もさくら哉

㊐　七番日記（文化8・1）・稿本発句題叢・希杖本句集・文政版発句集

▽　七番日記、前に「梅干のしはびたる老法師が」ではじまる文あり。我春集、前に七番日記とほぼ同趣の文をおき、中七以下「生れて桜〳〵哉」。

解　下々の家に生まれながら、平和な時代に恵まれて、夜桜にも興ずることができる、の意。

▼　中島『一茶集』に、「百姓の身分に生まれながら、昼は花の下で宴楽にふけり、夜はまた夜で、夜桜の下で浮かれ歩く、太平の世の恩沢に感じた気持」。

小坊主や親の供して山ざくら

㊐　花見の記（文化5・3）・文政版発句集

▽　花見の記に、「けう（ふ）町隣なる麻美と前の日より約し置けるにかれさはりありてやみぬ。さはとて翌の命待ものかハと、たゞ独来たりしに、幸、懐に『五元集』といふものゝありければ、是究竟の句相手也」。「小坊主や松にかくれて山桜　其角」「小坊主や親の供して山桜　一茶」とある。

解　真宗寺院の子息であろう。小坊主が親の僧の供をして山桜を楽しんでいる、の意。其角の「小坊主や松にかくれて山桜」

に和したもので、もとより実景を詠んだものではない。

鞦韆戯

ぶらんどや桜の花を持ながら

㊐　文政句帳（文政7・2）・ほまち畑（文政7・1）・たねおろし・文政版発句集

▽　ほまち畑、一茶・栗之・文虎の三ツ物。「文政七年申正月二十九日」とある。たねおろし、前書「鞦韆和名由左布利里言布良武杼」。

注　「ぶらんど」、ぶらんこ。一説にポルトガル語から、という。『太祇句選』「ふらこゝの会釈こぼるゝ高みより」。

解　ぶらんこで遊んでいる幼児。その手には桜の小枝が握られている、の意。

▼　勝峯『名句評釈』に、「子供が花を手に持ちながらブランコをしてゐる。只それだけであるが、茲にも童心の一茶が子供の遊びに浸つて、興を持ち憂を持つてゐる一面が句そのものと共に微笑ましく表出されてゐる」。伊藤『小林一茶集』に、「桜の枝を持ちながらぶらんこに嬉遊する児女の体」。

桜草という題をとりて

我国は草も桜を咲にけり

㊐　稿本発句題叢（文政3以前）・随斎筆紀・希杖本句集・文政版発句集

▽　発句題叢、前書「桜草」。上五「我国〔は〕」。随斎筆紀、前書なし。上五「我国〔は〕」。

注　「我国は」の「我国」は、「おらが国」「おらが世」程度の意に解したい。「桜」と併せて、「神国日本」「大和民族」と結び合わせることには疑問がある。

解　わが国は、野辺の草までが桜の花をつけている、の意。

▼　東松露香「俳諧寺一茶」（一茶同好会編・刊『俳諧寺一茶』明43所収）に、「殊に、其桜草の句の如きは、邦人の伝称として已まざる彼の本居宣長の、『しきしまのやまと心を人とはゞあさ日に匂う山さくらかな』有名なる桜花の国雅といつれぞや。惟ふに、一茶の句意は、大和魂は独り桜花に比せる武人のみ有せるにあらずして、我々百姓も将た町人も皆有せりといへるが如く、僅々十七字に之をおしひろめて、更に、事しあらば国民皆兵也の意をも、小さき桜草に藉りて、殆ど遺憾なきまでに其気を吐きたる処、太だ痛快を覚ゆるなり」。川島『新釈』に、東松の評を引き、「要するに、彼の句に見る『神国の松をいとなめおろしや舟』程度のもので、（中略）従ってこの句も反撥的の愛国心の現れとも見られるが、大体罪のないお国自慢である。この句を指して直ちに彼の国家的観念の発現などゝ四角張って云はれたら、地下の一茶はまごつくであらう」。勝峯『名句評釈』に、「無論一茶の愛国主義は、悲歌慷慨のそれでなく、況んや実行運動を伴なふやうなそれではない。又時としては、徳川の治下を謳歌したのかとも想はれるのも有って、所謂ありふれた愛国者ではないであらうが、彼の多くの句が示唆する通り、彼は神国を愛し、日本を愛し、お国自慢を詠出することに於て、彼を愛国者と評して、決して彼をして地下にまごつかせるものでないことを信じたい」。暉峻『鑑賞』に、「勿論、勤王精神とか言った深い意味を持つものではなく、加茂真淵、本居宣長以来、漸次正常な国体観念が普及され、殊に一茶時代には平田篤胤が活躍してゐたのですから、一茶も自づと我国が神国なる所以を知ったのでありませう。そして恐らくこのやうな句を作るについては、本居宣長の『敷島のやまと心を人問はば朝日ににほふ山桜花』の歌を知ってゐたであらうと思はれます。一茶にはこの句だけでなく、『桜さく大日本ぞ〳〵』『日本は這入口からさくらかな』などの如き、愛国的な句があります」。

今すこしたしなくもがな菫草

㊀　享和句帳（享和3・12）・七番日記（「寛政元年ヨリ文化六年迄」と注記して）・浅黄空・自筆句集・希杖本句集・文政版発句集

▽　享和句帳・浅黄空・自筆句集・文政版発句集、中七「たしなくも哉」と表記。

注　「たしなく」、終止形は「たしなし」。乏しい、の意。「も哉」は「もがな」であろう。「小夜しぐれなくハ子のない鹿に

哉」（おらが春）では、「哉」の右肩に濁点を付して「がな」と読ませ、推量の意に用いてある。ここでは、形容詞の連用形「たしなく」に続けてあり、「もがな」（願望）と読ませるつもりであろう。

解　中七を「たしなくもがな」と読めば、乏しくあってほしい、の意になる。一句は、群生したすみれを眼前にして、「菫草」というにはもっと乏しくあってほしい、と解される。この場合、芭蕉の「山路来て何やらゆかしすみれ草」（野ざらし紀行）が念頭にあったと考えられる。

百両のいしにつりあふつゝじ哉

㊗　文政版発句集

▽　文政句帳（文政8・4）、中七「石にもまけぬ」。

注　「百両のいし」、みごとな庭石、の意。

解　みごとな庭石である。それにしても、このつつじはこの庭石に一歩もひけをとらない、の意。

若草や北野参りの子供講

㊗　八番日記（文政2・2）

注　「北野」、北野天神（祭神は菅原道真）。例祭は六月二十五日であるが、これは各地の分社で行われる二月二十五日（道真の命日）の「天神講」。

解　若草の季節、子供たちが連れだって天神さまへ行く、の意。さと女の成長を夢みての作である。

はるの日の入所なり藤の花

㊗　文政版発句集

解　春の一日がようやく暮れようとしている。その日の沈む方角に、ぐったりとしたさまで、垂れさがる藤の花があるという

のである。

東西の花に散たてられて、こゝろも山にうつりゆくといふ日は、三月廿日なりけり

煤くさき笠も桜の降日かな

㊐　花見の記（文化5・3）・文政版発句集

▽　前書の表記に異同あり。文化句帳（5・3）、上五「煤くさひ（い）」。座五「咲日哉」。

解　すっかり煤の香がしみ込んでしまった旅笠も、桜の季節が到来して、ようやく出番がまわってきた、の意。

君が代の大めし喰ふて桜かな

㊐　文政版発句集

解　太平の恩沢に浴し、腹いっぱい大飯を喰らい、その上花見とはありがたいことよ、の意。

根岸にて

山咲をさし出しさうな垣根かな

㊐　我春集（文化8）・文政版発句集

▽　七番日記（文化・8・3）、前書「根岸」。中七「さし出し顔の」。

解　「七重八重花は咲けども」と、短冊でもさし出されそうな雰囲気である。山咲の咲きそろった根岸のあたりは、の意。

惣々にきげんとらるゝ蚕かな

㊀　文政版発句集初出

▽　七番日記（文化15・3）・だん袋・自筆句集、上五「村中に」。

解　孵化したその時から、さっそく機嫌をとられる蚕。「おかいこさま」、その呼称そのものである、の意。

さまづけに育られたる蚕かな

㊀　七番日記（文化15・3）・だん袋・自筆句集・文政版発句集

▽　八番日記（文政3・6）、上五・中七「さま付に育上たる」。

注　「さまづけに」、蚕は俗に「かいこさま」「おかいこさま」と呼ばれる。

解　立派に成長した蚕。「おかいこさま」と「様付け」にして大事に育てられた蚕である。

やよしらみ這へ〳〵春の行方へ

㊀　七番日記（文化11・3）・句稿消息・文政版発句集

解　「やいやい虱よ」、あっちへ行け。過ぎ去った春の方へ這って行け、の意。

茶もつみぬ松も作りぬ丘の家

㊀　稿本発句題叢（文政3以前）・発句鈔追加

▽　嘉永版発句集、中七「杉」にも読めるが、「松」とするのが妥当。

注　「茶もつみぬ」、茶園と称するほどのものではなく、庭の隅などに植え、自家製の茶を作るための、いわば趣味としての「茶つみ」であろう。

解　茶もつみ終え、松の手入れも済ませ、ゆったりとした暮しぶりの家のさまを詠んだ句。

舞〳〵や翌日なきはるを笑ひ顔

㊐　発句鈔追加

▽　文化句帳(文化2・3)、中七以下「翌なき春を顔を染(ママ)て」。稿本発句題叢、座五「むり笑」。希杖本句集、座五「むら笑」。

注　「舞〳〵」、「舞々蛾」かとも思われるが、「舞々蛾」の孵化は夏であり、しかも座五に「笑ひ顔」とあるから、幸若舞を舞うことを業とする者でなければならない。ここでは、幸若舞に擬した門付と見る。

解　幸若舞を舞う門付の大夫。翌日の出世はもとより生活のあてもないのに、楽しそうに笑顔を作っているよ、の意。

ゆさ〳〵と春が行ぞよ野辺の草

㊐　七番日記（文化8・3）・我春集・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解　よく伸びた草原が「ゆさ〳〵」と波を打っている。ああ、春が立ち去って行くのだなあ、の意。行く春の足音を、風に波打つ緑の野面に聴いているのである。なお、道彦に「ゆさ〳〵と桜もてくる月夜哉」（蔦本集）がある。

▼　川島『新釈』に、「『ゆさ〳〵』は、頭重げに茂って居る草が、野一面に風（強い風ではない）に揉まれて居る様で、一日野に出た一茶は、其処にすっかり用意されて居る夏と、春との交流を目のあたり見たのである。私達はこの句を通して、風にゆすられながら、強い日に照らされて白い葉裏を翻して居る草の輝きや、やゝ足早やに飛ぶ夏近い雲や、足許から登る草の温気のやうなものまで仄に感じ得る。『ゆさ〳〵と春が行く』の叙法は、さすがに老手である」。黒沢『研究』に、「春の行衛を一茶はヂッと見つめてゐるのです。一茶の鋭い感覚が自然の深いところに触れてゐる。ゆさ〳〵は青嵐とは違つて、やわらかい草木のうごきであります。自然への一茶の交流が、さすがに老練な口調で表現されてゐます。春の草の輝きが眼前に彷彿として見えるやうだ」。丸山『小林一茶』に、「句は、晩春の一日、野外を逍遙しての吟であろう。頭重げに茂った野の草々。既に夏近い日が一望の野に光りわたって、丘陵の端に立つ雲の白さも夏めいてゐる。野面を吹きわたる風に、緑濃い草々がゆったりと波打って、静かに春が立ち去って行くように感じられる。一茶はそこに自然の推移を、既に用意されている夏と、春との交流を目のあたりに見たのである。『ゆさ〳〵』は、風にゆすられる野辺の草の全体感を

鮮明にとらえており、この一語によって、風に波打ちながら、時折日に照らされて白い葉裏を翻している草の輝きや、足元から立ちのぼる草の温気のようなものまで感じられる。『春が行く』と続けた叙法も、老練である」。

陽炎の内からもたつ浅生かな

㊀　嘉永版発句集初出

▽「浅生」は、「葎」の誤りであろう。「文化句帳」（文化2・1）、座五「葎哉」。稿本発句題叢・希杖本句集、座五「在郷哉」。

解　陽炎がもえ立っている。その陽炎の中からも葎の蔓が伸びている、の意。

地獄

夕月や鍋の中にて啼田にし

㊀　ほど拍子（文政7）・文政版発句集

▽　七番日記（文化9・2）、前書「六道」。「鳴田螺鍋の中ともしらざるや」。九日集（文政8序）、前書「地獄」。中七「鍋の中にも」。

注　「地獄」、十界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏）中の三悪道の一つ。後出「霞日や」の前書「天上」までを「六道」（輪廻界・迷界）という。

解　夕月が淡い姿を見せている春の夕方。台所の隅で、鍋に入れられた田螺が鳴いている。その、命待つ間の生をいとおしく思われる、の意。

▼　暉峻『鑑賞』に、「夕月の淡くかかる頃、流し元の鍋の中の田螺が、やがて煮られて食膳に供せられる事も知らぬ気に鳴いてゐる。いづれ昼間の野良仕事の折にとつて来た田螺でありませう。春の田園生活の中に発見した哀傷であります。同

じテーマを一茶は、『鳴田螺鍋の中ともしらざるや』とやってるますが、これでは如何にも底を割った感じ、説明的です。（中略）蕪村にも亦『能きけば桶に音を啼田螺哉』といふ句がありますが、同じテーマでも、『桶に』といひ、「音を啼」といふ措辞に、都会的な感じがつき纏うてをります」。

餓鬼

花散や呑たき水を遠霞

㊐　文政版発句集

▽　中七「呑たき水は」の誤りか。株番、前書「餓鬼」。中七「呑たき水は」。七番日記（文化9・2）、中七「呑たい水も」。

注　株番、「題六道」と前書して、「地獄」「世中は地ごくの上の花見哉　一茶」「是がまあ地獄の種か花に鳥　鶴老」。「餓鬼」「花ちるや呑たき水は遠霞　一茶」「しらぬ火の春も忽暮にけり　鶴老」。「畜生」「散花に仏とも法ともしらぬ哉　一茶」「牛馬の寝てくふ春の野山哉　鶴老」。「修羅」「散花に太刀長刀もかざり哉　老」「穴一のあなかしましや花の陰　茶」「人間（茶）」「人〻よ花もあらしもうはの空　老」「さく花の中にうごめく衆生哉　茶」。「天上」「かすむ日やさぞ天人の御退屈　〃」「永日と思ふ程なほ暮やすし　老」とある。

解　舞い降りる桜の下でこの世の春を満喫しながら、「呑たき水を遠霞」と餓鬼道に思いをやるというのである。

畜生

散花に仏とも法ともしらぬ哉

㊐　七番日記（文化9・2）・株番・文政版発句集

▽　七番日記、前書なし。

解　散る花にうかれて、後生の大事をたのむことさえ知らない。これでは畜生と違わないではないか、の意。

修羅

声〻に花の木陰のぼくちかな

㊀　文政版発句集

解　狂ったような声を立てて、博奕に命がけのさまだ。この美しい花の木陰で、の意。博奕に狂うさまは、阿修羅の世界である。

人間

咲花の中にうごめく衆生かな

㊀　七番日記（文化9・2）・株番・浅黄空・自筆句集・文政版発句集

▽　七番日記・自筆句集、前書なし。浅黄空、前書「人間界」。八番日記（文政2・3）、上五「陽炎の」。

解　仏の願力にたよるすべも知らず、花にうかれている群衆。「うごめく」という語に現実感がある。即興の句。

▼　中島『小林一茶集』に、「即興の題詠ではあるが、花見時にどっとくり出す群衆を、いわば超然と上からでも眺めた感じが、うまく表現されている」。

天上

霞日やさぞ天人の御退屈

㊀ 株番・文政版発句集

解　地上はすっかり霞におおわれている。こんな日は天上の人もさぞかし退屈なことだろう、の意。晴れた日には、「咲花の中にうごめく衆生」を見おろしていた天人である。

▼ 黒沢『研究』に、「何だか天人が退屈の余り霞の上で大欠伸をしてゐるところが目に見えるやうです。一茶には其れがきつと見えたのであらうと察せられます。天人を普通の人間のやうに見て云つたところがやはり一茶の強みであります。これも単に滑稽句と見過して了つてはならないと思ひます」。勝峯『名句評釈』に、「一寸奇想天外といふ滑稽句である。空に霞が立ちわたつてゐるから、天上からは下界の有様が見下されない。それで天人様もこの日永を定めし御退屈だらうと興じたのである」。

夏の部

下谷一番の顔してころもがへ

㊀ 七番日記（文化10・4）・志多良・句稿消息・文政版発句集

▽ 七番日記・志多良・句稿消息、前書「手まり唄」。浅黄空・自筆句集、前書なし。座五「梅の花」。

注　「下谷一番の顔して」、岡本昆石の『流行時代子供うた』（明27）に、「一人姉さん太鼓が上手、一番美のは下谷に御座る。下谷一番粧飾者で御座る、五両で帯ヲ買て三両でくけて、綴目〳〵へ七房下て、折目〳〵へ口紅さして……」とある。

解　「下谷一番粧飾者で御座る」という顔つきで、新しい袷を着せてもらっているよ、の意。

▼ 吉田紘二郎「小林一茶」（俳句講座『鑑賞評釈篇』改造社、昭7）に、「他人に向けた句と見られる。都会人の虚栄心を見つけた句とも見られる。同時に貧しい孤独なかれ自身の、たゞ一枚の更衣に有頂点になつた心とも見られる。いづれにしても皮肉であり、諷刺的である。だが、その針はきはめて柔らかな当りをもつてゐる。快いあたりである」。勝峯『名句評釈』に、「七番日記文化十年四月の部に『手まり唄』と題してこの句が出てゐる。この題は不審である。どうも子供の姿を詠んだ句らしくない。（中略）さてこの句は一茶自身の事か、他人の事か。或人は他人の様を傍観しての一茶の冷評とするが、私は一茶自身の句として解したい。（中略）物質的には恵まれてゐないが、欺うして気楽に句作三昧に耽り得るといふことは何といふ果報であらう。金が有つて金に苦しむ者が多い世の中に、金なくて金に若しまぬ自分は何といふ恵まれた人間であらう。俺こそはこの下谷一番の長者だ。かういつた朗らかな気持で更衣をした一茶である。（中略）もし之を他人の上を詠んだとすれば、鼻持ちならぬ金持か有力者を指して、何だ下谷一番の人間のような顔をしてと反感を持つた句になるが、どうもそれではこの句に落ちつかぬと思ふ」。穎原『俳諧名作集』に、「『下谷一番伊達者でござる』といふ手鞠唄の文句をきかせた作意。即ち『下谷一番の顔』は、『下谷一番の伊達者らしい顔』の意である。初袷を着すまして、我こそはと得々然としてゐる者を、軽く揶揄して居る」。

おもしろい夜は昔なり更衣

㊐ 句稿消息（文化11）・希杖本句集・文政版発句集

▽ 七番日記（文化11・4）、上五・中七「遊んだる夜は昔也」。

解 更衣の時節である。夜遊びの好季とばかり、おもしろく遊びまわったのは、今となっては昔のこと、の意。

▼ 川島『新釈』に、「淋しくとも、一面気楽な、不拘束な若い日の追憶が、初袷の軽い気分の中に一脈の哀愁を曳いて作者の胸に蘇つて来るのであつた。悲しみを云はず、洗練された叙法によつて、老懶、青春を悼む思がしみ〴〵と追つて居る。『昔なり』と、中七で切つてあることも詠嘆を深めて居る」。

年とへば片手出す子や更衣

㊀　七番日記（文化15・4、12＝重出）・おらが春・文政版発句集

▽　七番日記（12・7）、中七以下「片手広げる棚経哉」。

解　更衣の季節。母親に新しい袷を着せてもらっている子に、年を問うとぱっと片手を広げて見せた、の意。

▼　勝峯『名句評釈』に、「これは解釈する迄もなく万人が万人経験の人事である。ころもがへしたばかりの、恐らく――彼の句に、『たのもしやてんつるてんの初袷』とあるやうに去年の着物の短くなつて、足先を長く出してゐる子供の可愛さに、年をきいてみるといふ気持が余分にも働きかけたことであらう。『ころもがへ』といふのが単に季をあらはすだけでなく、かうしてこの句に一層の生命を与へてゐると思ふ」。勝峯『評釈おらが春』に、「拇指を折るか、も一つかさねるか、三つ四つの頃である。口より手の返事も極つた型である。季節の感じにぴつたり一致する、この更衣の語が誰にも出るとは云へない。一茶でなくてはそこへ目が届かぬ。平凡視されない着眼である」。川島『おらが春新解』に、「関東の田舎では、今でも『おっぴらきです』などという母親がある。さっぱりと袷に着かえたはずんだ気分でパッと片手を開いて見せる子、これは論なく男の子である。五つは男の子の祝われる年でもある。得々たる子供のつぶら目が見える」。加藤『秀句』に、「傍の親のしたり顔が見えるような場面」。

けふの日や替てもやはり苔衣

㊀　七番日記（文化10・4）・志多良・文政版発句集

▽　志多良、別に「五月廿一日興行」と前書して、この句を立句とした大綾・知洞との三吟歌仙を収める。

注　「けふの日」、更衣の日。「苔衣」、ここでは「ぼろ衣」、の意。

解　今年もまた更衣の時季に出会うことができた。着がえてみても、それはまた人のいやがるようなぼろ衣だよ、の意。

立ちながら綿ふみぬいて出たりけり

㊀　句稿消息（文化13）・文政版発句集

▽ 七番日記（文化13・4）、中七「綿引抜て」。
解　ほころびた綿入れの裾から中の綿が出ている。それを足で踏み抜いて家を出て来た、の意。たしかに裾のあたりは袷に変ったが。こういう生活も体験したのであろう。
▼ 句稿消息、成美の評に「妙」。

文虎が妻身まかりけるに

おりかけの縞目にかゝる初合（袷）

㊀ 文政版発句集
注「文虎」、西原文虎。俳仏堂・松堂・松園などとも号した。信州浅野の飯山藩御用油商。『ほまち畑』（一茶・文虎両吟集）・『一茶翁終焉記』『文虎本・おらが春』などがある。
解　夫・文虎のためのものであろう、織りかけの縞が機に残っている、の意。

小児の行末を祝して

たのもしやてんつるてんのはつ袷

㊀ 七番日記（文化13・3、4＝重出）・おらが春・希杖本句集・文政版発句集
▽ 七番日記（13・3）・希杖本句集、前書「小児の成長を祝して」。七番日記（13・4）、前書なし。七番日記（11・4）、上五「金時が」。座五「袷かな」。
解　母親の予想をはるかに超えて成長した子供である。縫い上げをしておいた袷の丈が、着せてみると「てんつるてん」な

のである。その軽怪な語調に、母親のうれしい気持ちが感じられよう。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「踝（くるぶし）から膝へ何寸かのところ。付紐がみづおちの辺にあたるのが、てんつるてんの着丈けであらう。此初袷は仕立おろしではない。去年も着せて、その時は、ゆきも、たけも揃つて、てうどよかつたのである。『こんなにまあ』の驚きより、一年でぐんと、かうまで伸びて行く、その育ち振りに『頼母しや』の感嘆が強いのである」。川島『おらが春新解』に、「この初袷は更衣の意で、新調ではない。去年の袷が滑稽なほど短くなってしまったのである。この時ほど小児の成長をまざまざと見せつけられることはない」。中島『小林一茶集』に、「『てんつるてん』は、おかしなほど短くなっている去年の袷の下から、二本の足がによっきりと突き出ているさま」。

春日野の鹿に嗅るゝ袷かな

㊐　文化六年句日記（6・1）・文政版発句集

解　更衣の時節、新しい袷に着がえて春日野に出てみると、鹿が寄って来てしきりにその香を嗅ぐようについて来る、の意。

▼　暉峻『鑑賞』に、「綿入を脱ぎすてて、紺の香も新しい袷の夏姿で春日野を行くと、木の間から鹿が出て来て、袖のあたりに嗅ぎ寄る。鹿は食物をねだるのでせうが、それが如何にも紺の香を嗅ぐやうに思はれるのです。美しく調つて、『嗅るゝ袷』といふ着想も清新で、一般に喜ばれさうな句です」。

南無あみだどてらの綿よひまやるぞ

㊐　句稿消息（文化11）

▽　句稿消息、上五「しんぼした」・座五「隙やるぞ」として、上五を朱にて抹消。上欄に「長らくの」「なむあみだ」と記し、さらに「長らくの」を朱にて抹消してある。七番日記（文化11・4）、「しんぼしたどてらの綿〔よ〕隙やるぞ」。希杖本句集、前書「綿貫」。上五「長〳〵の」。座五「隙やるぞ」。

解　ありがとう。丹前の綿よ、長い間ご苦労さん、の意。古く、よごれた丹前に、ちぎれて固くなった綿である。

人らしく替もかへたり苔衣

㊐ 句稿消息（文化11）・稿本発句題叢・発句鈔追加

▽ 中七「替もかへたり」は、「替もかへけり」の誤りであろう。句稿消息・発句題叢・発句鈔追加とも「替もかへけり」。七番日記（文化11・4）・真蹟（「五十聟」文化11）、中七以下「替もかへけり麻衣」。

注 「苔衣」、麻（夏用）の僧衣・法衣。ここでは、ぼろぼろの麻衣。

解 人並みに替えも替えたものだ、それにしても、何ともみじめな麻衣であることよ、の意。

草庵

其門に天窓用心ころもがへ

㊐ 梅塵本八番日記（文政2）・おらが春

▽ おらが春、座五「ころもがえ」。文政句帳（文政5・8）、中七以下「〔天〕窓うつなよ菊畠」。「窓」の右傍に「アタマ」と振り仮名。

注 「其門」、冬季に家の出入口に使う潜り戸（雪戸）であろう。更衣の時期まで、それがとり外してなかったとみる。

解 その潜り戸に気をつけてください。手がまわらなく、この時期になってもまだ外してないのだ、の意。

▼ 川島『新釈』に、「更衣の明るい気分を巧に捉へて居る。潜り戸の低いむさい住居へ、親しい同士三四人も打揃つて心置きない談笑の果に、帰つて行く人見送る人の間に交された雑談の一つのやうである。『あたま用心』と、中七が名詞止で、座五の『衣更』（ママ）が浮いて居るために、自然瓢逸な気分を出して居る」。勝峯『評釈おらが春』に、「袖をまくつて二の腕をたゝき、素袷となつて起居の軽さに、つい、あはてゝ不用意の、あッ、痛いッ、で目から火を出す。一茶はその滑稽さから、天窓用心の四字に関心して、低い出入口の門（かど）に使つて見たのである。塀にある『もん』でない。門口の『かど』である」。伊藤『小林一茶』に、「動作の軽快になつた余りに、うつかり過ちする勿れ」。川島『おらが春新解』に、

「我も人も綿入から袷にかわって身も心も軽く、つい、はずみがついて軽率に行動するので、オットあたま用心と、低いくぐり戸の出入などに注意する明るい気分である。（中略）七部集中の『続猿蓑』の歌仙八九間柳の巻の附句に、『あたまうつなと門の書つけ　芭蕉』とある。この句から示唆されたことは疑えぬので、『其門に天窓うつなよ菊畠　文政五年』『天窓用心と張りけり更衣　同七年』とあるのを見ても、脱化の過程が察知出来よう」。中島『小林一茶集』に、「衣がえに心浮き浮きして、その門に頭うち給うな」。

ふだらくや赤い袷の小順礼

㊥　八番日記（文政2・4）・発句鈔追加・希杖本句集

注　「ふだらく」、梵語 Potalaka の音写・補陀落。補陀落山。観世音菩薩のいます所。日本では紀州那智山などに擬す。

解　紀州那智山あたりであろうか。赤い袷を着た子供の順礼が行くよ、の意。

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷かな

㊥　おらが春・文政版発句集

▽　八番日記（文政2・9）、前書なし。上五「三間の」

注　「大山詣」、相模中郡の雨降（あふり）山石尊大権現に詣ること。六月二十八日に山を開き、心願のある者は木太刀に大願成就と書いて奉納した。『十八大通』に、下野屋十石衛門（祇園）は、三間半ほどの木太刀を作り、若者四、五十人に揃いのゆかたを着せてくり出し、品川の宿まで来たところ、召し捕りの役人が追いかけて来て、縄をかけた、とある。

解　四五間もある木太刀を、揃いの袷を着た若者にかつがせて、大山詣にくり出した者があったという、の意。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「大山の石尊へ木太刀を納めるのは江戸風俗の一行事であつた。四五間の長さになると二人や三人で運べるものでない。派手好みの檀那があつて、町内の若い衆に揃ひの袷を着せて、かはり〳〵の肩に擔がせ、かけ念仏で練つたさうである。一茶も江戸でたま〳〵此の賑ひを見物したことがあつて、後に思ひ出して詠んだ句であらう」。川島『おらが春新解』に、「大山詣では鼻ッ張りの強い江戸ッ子の気負った行事の一であった。派手者は町内の若者を総動員して、揃いのゆかたで木太刀をかつがせ、景気よく繰り出したのであって、風俗画風の骨董価値ある句であるが、四五間は見当であろう」。

鶯のほゝと覗くや花御堂

㊐　句稿消息（文化13）・文政版発句集

▽　七番日記（文化13・4）、前書「於関之亭」。上五「鶯が」。

解　鶯が、ちょつと花御堂をのぞいていったよ、の意。「ほ、ほけきよと」ではなく、「ほゝと」と、瞬時のさまを表現した。七番日記（文化13・2）に「鶯がちよいと隣の序哉」。

永日にかわく間もなし誕生仏

㊐　八番日記（文政2・4）

▽　八番日記、前書「八日」。上五・中七「長の日にかはく間〔も〕なし」。おらが春・希杖本句集、前書「四月八日」。上五・中七「長の日をかはく間もなし」。発句鈔追加、上五・中七「長の日をかはくまもなし」。

解　四月八日、花御堂に据えられた釈迦の立像に、甘茶をかける群衆が絶えない、の意。中七「かわく間もなし」に独自の表現がある。

▼　勝峯『評釈のおらが春』に、「天竺の灌頂法によつて、参詣者は甘茶を柄杓でつぎから、つぎへ浴せるので、誕生されてこのかた、今は日本の寺々で、けふ一日、刹那の乾きを見ないまで、敬虔に濡れ雫れてましますのである。（中略）『か

はく(わ)間もなし』が一茶的に『さぞ退屈な』の人間味、その深いおもひやりが託されてゐる。それを単なる説明的に解しては一茶は泣くであらう」。川島『おらが春新解』に、「白紅黄さまざまの花にいろどられた花御堂の中に据えられた誕生仏は、参詣の老若によって次から次と甘茶をそそぎかけられる。（中略）これは釈迦降誕の時、天竜が下って甘露をそそいだという故事にならったのである。この句は素直な写生句らしいが、実は、中七『かわく間もなし』は、『わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそしらぬかわく間もなし』（千載集）を引くまでもなく、涙を連想させるので、明るく祝福さるべき誕生仏に対する反射的な言葉が、ねらいであったと思う」。中島『小林一茶集』に、「この日、花御堂の中に安置してある誕生物に甘茶を灌ぎかける行事がある。終日善男善女に甘茶を灌ぎかけられて、『かわく間もなし』とユーモアをきかせた句」。

雀子もおなじく浴る甘茶かな

㊐　八番日記（文政2・4）

▽　七番日記（文化12・4）、上五・中七「雀子がざく〳〵浴る」。同（15・4）、上五・中七「雀らがざぶ〳〵浴る」。

解　四月八日、灌仏会、巣立って間もない雀までが、この日の行事にあやかるように、水溜りに降りているよ、の意。

馬の子が口さん出すや杜若

㊐　八番日記（文政2・4）

▽　七番日記（文化15・9）、上五「馬の子や」。座五「柿紅葉」。

解　馬の子が「口さん出す」ようなかっこうで、杜若に鼻先を向けたよ、の意。

▼　川島『新釈』に、「軽快そのもののやうな馬の子が、デリケートな首筋を延して、叢の中に一もと咲いて居る杜若を一寸吟味するやうに嗅いで見る。『つん(ママ)出す』といふ言葉に、いかにも他意なげに尖った鼻づらをチョイとつき出す馬の子の動作が見えるやうである。杜若といふ対象も、若々しい馬の姿と対象されて、フレッシュな印象を深める。癖のない写生句である」。

扇にて尺をとらせる牡丹かな

㊀　嘉永版発句集初出

▽　八番日記（文政2・9）・文政句帳（文政7・5）、中七「尺を取たる」。

解　大きく咲いた牡丹の花に、畳んだ扇がそっとあてて、その大きさを確かめたのである。「牡丹」に「扇」の取り合わせがねらいであろう。

葉隠れの赤い李になく小犬

㊀　坂本発句題叢・発句鈔追加

▽　中七「赤い李に」の「に」は「を」の誤記であろう。発句題叢、「赤い李を」。発句鈔追加、「赤へ（い）李を」。

解　葉隠れの熟した李がほしいというのか、子犬が李の木に向かってしきりに鳴いている、の意。

大江戸やおめずおくせず杜若

㊀　嘉永版発句集初出

▽　七番日記（文化12・6）・発句鈔追加、前書「勇」。上五「江戸入や」。座五「時鳥」。稿本発句題叢、上五「大江戸も」。座五「時鳥」。希杖本句集、座五「時鳥」。

解　葵の紋章のお膝元、この大江戸でも、杜若は少しの気おくれもないさまに、咲きほこっているよ、の意。

朝がほにはげまされたる夏書かな

㊀　稿本発句題叢（文政3以前）・発句鈔追加・希杖本句集

注　夏書（げがき）、夏安居（普通、四月十六日にはじまり七月十五日に終る）中に経典を書写すること。ここでは、自身の

作句・作文などをさすのであろう。

解　暑い日が続き、朝顔の花のしぼむまではと、精出して硯に向う。

渋柿のしぶ〳〵花になりにけり

㊐　嘉永版発句集初出

▽　七番日記（文化11・4）・句稿消息、中七以下「しぶ〳〵花の咲にけり」。稿本発句題叢・希杖本句集、中七以下「花のしぶ〳〵咲にけり」。発句鈔追加、中七「しぶ〳〵花と」。

解　この渋柿の花数は少ない。しぶしぶ花をつけたようだ。

隠家や死なばすだれの青いうち

㊐　稿本発句題叢（文政3以前）・希杖本句集・文政版発句集

▽　文化句帳（文化2・5）、上五「身一ツや」。

解　青簾の何とすがすがしいことよ。死なばこの簾の青いうちに。西行の「ねがはくは花の下にて春死なん」の歌が念頭にあったと見てよかろう。

▼　川島『新釈』に、「青簾の気分をやゝ誇張して嘆美した句である。要するに、安価な気分の満足といふ謗は免れまいが、この句の中には、何となく『南無阿弥陀仏』と云つて居るやうな安心があつて、無理にこね上げられたやうな嫌味は感ぜられない。ホツと大息をついて、これでいゝのだと云つて居るやうである」。勝峯『名句評釈』に、「恐らくこれは彼が繙読した徒然草中の『命長ければ耻多し、遅くとも四十路』位で死んだがよいとある文句をその儘に句化したのではあるまいか。（中略）草木黄落し野分木枯の蕭条たる頃より、死ぬならば青簾に風のそよぐ今の内、耻多き余生を生きんよりは、四十そこ〳〵の今死んだ方が『目安かるべけれ』と兼好そのまゝの気分に浸つて詠んだのではあるまいか」。前田『古典俳句を学ぶ』に、「つまり一句は、うだつの上らない隠れ家住いで孤独な死を迎えるのなら、せめて青簾の青々とした気高さ

の失せないうちにと願うのだというのである。変りばえのしない生活の惰性の間に孤独な死の深淵をかいまみて、一瞬の虚無に身をふるわすことがあったのである。『徒然草』の『命長ければ辱多し。長くとも四十に足らぬほどに死なんこそめやすかるべけれ』（七段）や、西行の絶唱『ねがはくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ』（山家集）などを意識したものであるが、この期の一茶の実存的な心情の一端を物語る句として印象深い」。

夕かげや駕の小脇の夏花持

㊀　稿本発句題叢・希杖本句集・文政版発句集

注　「夏花持」の「夏花」は、広い意味の夏花。樒に限らず、夏安居の期間に仏前に供える花と解してよかろう。駕籠の人物は、夏安居の期間に寺院などに参った人であろう。

解　夏の陽光がようやく治まらんとするころ、「夏花」を持った供を従えた駕籠が寺院の山門前でとまった。駕籠の主はどんな人物なのだろう。

▼　勝峯『名句評釈』に、「処は僧院のほとりか。駕の主は如何なる人か。夕かげ漸く迫らんとする頃、駕の小脇に夏花を持って立つは、その駕の主に仕へる腰元ででもあらう。さびしい中に一脈の美しさがたゞよふ。かげ、駕、小脇、夏花とカ行の語を二つの『の』でつないだ語調も優婉に響く。一茶の作の中では珍しい繊細巧緻の一句である」。

是ほどのぼたんと仕かたする子かな

㊀　七番日記（文化15・4）・たねおろし・文政版発句集

▽　たねおろし、「正風院庭前」（注、「正風院」は長沼住佐藤魚淵）と前書して、素鏡の「評判の牡丹はどれとどれにかな」に添えてある。七番日記（15・12）、希杖本句集、上五「是程と」。文政九・十年句帳写（文政9）、上五「こらほどゝ」。

注　「仕かた」、身ぶり、手まね。

解　こんなに大きな牡丹の花が、と大きく手を広げて数える子供である。

▼川島『新釈』に、「眼をクリ〳〵させて、精一杯の手真似で牡丹の大さを報告して居る。（中略）子供の動作を通して牡丹の華麗さを想像させる二重の叙法も、調が洗練されて居るために少しも無理なく頭に入って来る。牡丹の花に対して『仕方』といふ語も、一寸思付けない巧みさである」。勝峯『名句評釈』に、「くり〳〵した眼を更にも大きく見張って、ちッちやい紅葉の手で、こんな大きな牡丹だわよと報告するところ。何といふ可愛らしい無邪気な情景であらう。聞いて居る作者の相好をくづしてゐる様も目に見るやうだ」。暉峻『鑑賞』に、「牡丹を見て来た子供が、子供らしい感激を面にあらはして、『こんなにあつたよ』と、手で輪を拵へて牡丹の大きさを報告してゐる、ほほゑましい情景であります。牡丹の豊麗さが、子供のおどろきを通じて、極めて自然に表現されてゐます。まことに老巧なる句であります」。

てもさても福相のぼたんかな

㊀　文政句帳（文政7・6）・文政版発句集

▽　文政版発句集、上五「てもさてもて(衍)も」。

解　いかにも、いかにも、福々しい牡丹であるよ、の意。

通路に階子わたすや杜若

㊀　文政句帳（文政8・4）・文政版発句集

▽　文政版発句集、上五「通ひ路に」。

解　見物の人に踏まれないように、通り道に梯子が渡してあるというのである。

二十四年栄花只一夜夢

善尽し美を尽してもけしの花

㊐ 文政版発句集

注　前書の「二十四年ノ栄花只一夜ノ夢」は、平氏の栄華を言ったもの。寛政句帳（寛政4）に、「露の間や二十四年のみやこあと」。

解　美しく咲いたけしの花も、時の流れには抗しがたい、の意。

▼　勝峯『名句評釈』に、「美しきもの久しからずの嘆であらう。濃艶にして弱々しきもの、けしの花の如きも少い。その点に於てこの句はよくけしの生命を道破し描写してゐるが、この類の句はとかく概念化し易く一歩を誤れば月並に堕する。尽しにけしの『し』が重なつたのは偶然の協韻ではあるが、この句の調子を引きしめる力が有る。（中略）もし平家の栄枯を詠んだものとすれば、自然比喩として解さねばならぬ」。

桑の木は坊主にされてけしの花

㊐ 八番日記（文政3・4）・文政版発句集

▽　風間本、中七「坊主(に)さされて」。梅塵本、中七「坊主にされて」。文政句帳（文政5・4、6・4＝重出）、座五「かんこ鳥」。文政句帳（7・夏）、上五「桑の木や」。座五「かんこ鳥」。

解　蚕の季節。桑はすっかりその葉をつみとられ、前日までの盛んなるさまは見るかげもない。一方目を転ずれば、芥子の花が今が盛りとばかり咲き誇っている。

けしさげて群集の中を通りけり

㊐ 文政版発句集

▽　文政句帳（文政8・4）、中七「ケン嘩の中を」。

解　だらりとしなだれた芥子の花を一本手にぶらさげた男が、人だかりの中を行く。芥子の花を手にぶらさげた男の内心と、それを外から見る者の内心の対比に俳諧性を見たい。

▼川島『新釈』に、「この句で最も注意しなければならないことは、この句が確かに芥子の花の句だといふことである。梅の花でも菊の花でも、其他のどんな花を持つて来ても、決してこの句の生命は伝へられない筈である。濃艶でデリケートな芥子の花の持つ感じは、恰度首の細い肺病の美人を見るやうな感じである。吹けば飛びさうにゆらめく――その芥子の花をさげて群集の中を通抜けて行くはら〳〵とした気持。同時に、美しい花を持つて行くことに拠る仄かな晴がましさまでも感ぜさせられる。斯うした情景は、人事の描写に根を据えた余程感覚の鋭敏な作家でないと、一寸極め得ない境地だと思ふ」。勝峯『名句評釈』に、「あの弱々しさうな、されば落ちなんとするやうなあえかの花を、群集の中――喧嘩では余りあくどい感じがする――を後生大事とさげて通るのは、あぶなッかしさの美といふやうなものを強く感じさせる。危さの美といふことは自然界にも人間界にも屢々存在することで、そこを行つたのは甚だよいが、しかし、わざとらしさの対照といふ作為の迹が全然ないとも言はれぬ。（中略）この花をさげて通る人は一茶か、或は他の人を一茶が目撃したのか。美を発見したといふ点では後の方であらう。一茶自身としてはより作為的になるであらう」。暉峻『鑑賞』に、「芥子の花の美しさは、脆美とでもいひませう、脆く散り易いところにあり、蕪村も『けしの花籬すべくもあらぬ哉』と詠つてをります。その風にも得たへぬ脆く美しい芥子の花束を携げて、浅草の仲店通りのやうな、夜の新宿のやうな群集の中を抜けてゆく、はらはらとする気持、美のスリルを詠つたのであります」。金子『一茶句集』（中七「ケン嘩の中を」の釈）に、「同時期に、『けし提て群集の中を通りけり』もあるが、『群集』では韻律が鈍る。『けし』『けん嘩』の乾いたひびき合いに人間たちの顔があり、その人たちに向けた一茶の諧謔（フモール）がある。『群集』といふことばは、どこかで見かけたものを遣ってみただけのことだったろう。一茶の『荒凡夫』に徹しようとするこころの自由さが受け取れる句で、私は、この活気、この明るい諧謔、そして、芥子の花の赤の美しさを好む。一茶の代表作と見ている」。

卯の花の垣に名代のわらぢかな

㊀　文政版発句集・希杖本句集

▽　七番日記（文化13・4）、中七以下「門はわらぢの名代哉」。句稿消息、中七以下「垣はわらぢの名代哉」。文政句帳（文政8・4）、中七以下「垣根に犬の産屋哉」「垣根に吹雪はら〳〵と」。

注　「名代」、みようだい。

解　卯の花の垣根に、主人の行脚中は名代の草鞋を掛けておく、というのであろう。

卯の花や臼の目切と鶯と

㊐　文化六年句日記・文化三―八年句日記写・春甫あて書簡（文化6・3・20付）・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

注　「臼の目切」、「臼」は石臼。「目切」は、磨り減った目をたてること。

解　卯の花の季節、北国の人の往来も増えて活気がもどってきた。カチカチという臼の目切りの音の向うから、ゆったりとした鶯の鳴き声が聞こえてくる。

我上へ今に咲らんとこけの花

㊐　一茶翁終焉記・文政版発句集

▽　終焉記、前書「ことし文政十年卯月のころ」。七番日記（文化12・4）・随斎筆紀、上五・中七「我上にやがて咲らん」。

注　「我上」、我が墓石の上。

解　いまに、自分の骨を収めた墓石の上にも咲くであろう、この苔の花、の意。

かわくまで縄張庭や若葉吹

㊐　文化句帳（文化8・3、5＝重出）・梅塵抄録連句集（一茶・白兎・露谷三吟歌仙）・発句鈔追加・文政版発句集

解　雨の多い若葉吹く季節、庭に水溜りができたのである。幼児などが這入り込んだりしないように、縄を張ったのであろう。

若葉してまたもにくまれ榎かな

㊐　七番日記（文化11・4）・句稿消息・稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解　若葉の時季、今年もまた榎の木の枝が大きく伸び繁ったことだ、の意。

門番のほまちのけしの咲にけり

㊥　稿本発句題叢（文政3以前）・発句鈔追加・希杖本句集

▽　上五「門番の」は、「門番が」の誤りであろう。稿本発句題叢以下いずれも「門番が」。享和句帳（享和3・12）、中七以下「ほまちなるべしけしの花」。

注　「ほまちのけし」、個人的に所有する芥子。

解　門の脇にでも育てていたのだろう、その芥子の花が咲いているよ、の意。

卯の花の吉日もちし後架かな

㊥　八番日記（文政2・4）

▽　梅塵本八番日記（文政2）、上五「うのはなは」。

注　「吉日もちし後架」、四月八日の甘茶の残りで墨をすり、「ちはやぶる卯月八日は吉日よかみさげ虫を成敗ぞする」というような歌を書いて、厠に逆さに貼ると髪さげ虫（うじ虫）の発生を防ぐというまじないがあった。『世事百談』は、「年々の卯月八日は吉日よ尾ながのむしをせいばいぞする」（周防、野上）、「今年より四月八日は吉日よ神さげ母郎せいばいぞする」（下野、間久里）をあげ、『私漢三才図会』は、「今年より卯月八日は吉日よ尾長くそ虫せいばいぞする」を引く。

解　卯の花の季節、吉日に恵まれた厠であるよ、の意。

▼　川島『新釈』に、「甘茶で歌を書いて張付けるほどの余裕があれば、其日は特に念入りに掃除もされやうし、旧暦のことゆゑ折から卯の花の盛りで、厠にも一景添はうといふものである。句意は『卯の花の咲く頃恵まれた日を持った厠であることよ』の意。この『吉日』は、歌の中から引張つてある語であるが、明るくさば〳〵した其日の気分がよく出て居る。失はれて行く年中行事の懐しさを、私達は比種の作品を通してのみ味ひ得る」。

庵の苔花さくすべもしらぬ也

㊥　七番日記（文化9・4）・株番（重出）

解　私の住まうわずかな庭にも苔はある。だが、これは花をつけるすべも知らない、の意。

禅寺

すみ〳〵も掃除とゞくや木下闇

㊥　文政句帳（文政8・6）・文政版発句集

▽　文政句帳、前書なし。同句帳（8・3）、上五「隅〳〵の」、座五「手杵哉」。

解　こんもりと木立におおわれた禅寺の境内、その隅々までよく掃除がゆきとどいてていることだよ、の意。

法談の手まねも見えて夏木立

㊥　文政版発句集

▽　八番日記（文政3・10）、上五・中七「夏(夜)談義の仕方も見(え)て」。梅塵本八番日記（文政3）、上五・中七「夜談義の仕かたも見(え)へて」。

解　境内の夏木立の間から、堂内で法話をする僧の手ぶりが見える。境内も堂内も静寂。

▼　川島『新釈』に、「木の間から遙に寺の本堂の透いて見える様と見てもよい。壇上に立つ僧侶の法衣から現れる顔と手先だけがほの白く見えて、法話の調子につれてその手先が上つたり下つたりして居る。聴衆は水を打つたやうに静まり返つて居る三昧境である。『手真似も見えて』の中七に依つて、軽い客観描写となつて居る。宗教的な主観を交へずして、宗教上の場面(シーン)のハツキリと描かれてあることは珍しい。非常に爽かな涼味の感ぜられる作である」。勝峯『名句評釈』に、「涼

しい夏木立の行く手、広々とした金堂には年寄を主にして善男善女が群集してゐる。一段高い所に座を占めたお話上手な住職が、何やら切りに手真似して富婁那の弁を振つて居るらしいのが目に見える。一寸面白い目つけどころである」。

大寺は留守の体なり夏木立

㊥　嘉永版発句集初出

▽　文政句帳（文政7・12、8・6＝重出）、上五「山寺は」。

解　うっそうと繁る夏木立に包まれた大寺は、留守のように静まりかえっているよ、の意。

笋の子に病のなきはなかりけり

㊥　発句鈔追加・希杖本句集

▽　中七「病のなきも」の誤りであろう。志多良・稿本発句題叢、中七「病のなきも」。

解　全身を皮に包まれた姿を言ったのであろう。

首たけの水にもそよぐ穂麦かな

㊥　八番日記（文政2・5）

解　洪水であろうか。穂を出した麦は首まで水につかってそよいでいる、の意。

せい出してそよげ若竹今の内

㊥　一茶・呂芳・春甫・素鏡・掬斗五吟歌仙（「文化七年五月廿二日於掬斗亭興行」・未満）・稿本発句題叢・希杖本句集・文政版発句集

解　精出して、そよげよ若竹。存分に風にそよげるのは今のうちだけだぞ、の意。

若竹と呼るゝうちもすこしかな

㊀　文政版発句集

▽　七番日記（文化10・4）、中七以下「云るも一夜二夜哉」。句稿消息、中七以下「云るゝも一夜ふた夜哉」。志多良、中七以下「そよぐも一夜二夜哉」。

解　若竹、若竹と呼ばれるのもわずかな間、すぐに背が曲ってしまうのだ。

あつぱれの大若竹ぞ見ぬうちに

㊀　八番日記（文政2・2、6＝重出）・おらが春・文政版発句集

▽　八番日記（2・2）、上五・中七「あつぱれ〔の大〕わか竹〔ぞ〕」。同（2・5）、「少見る(ぬ)内にあつぱれわか竹を(ぞ)」。

解　しばらく見ない間にもうこんなに高く成長してしまったことだ。まさに「あっぱれ」と賞すべきだ、の意。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「育ちも早い、伸びるのも早いのは竹である。殊に猛宗のやうな太い逞しさを胴廻りに、高い凌霄性を持前とする若竹は、うつかり見忘れて、親竹すれ〳〵に育つたのを知らない場合がある。あつぱれは褒言葉である。（中略）この句は下五を『見ぬうちに』と置き、時間を含めて若竹の偉大な伸び方を褒めはやして、例の大の字を惜しまず褒美に与へたのである」。川島『おらが春新解』に、「少し見ない間に立派な若竹となってしまった。全く、親竹をしのぐ若竹の伸び力のたくましさは、目を見張らせるばかりである。わか竹であるために『あつぱれ』が利いている」。

酢になる間と配るまくらかな

㊀　文政句帳（文政8・3）・文政版発句集

▽　中七「間を配る」の誤りか。文政句帳、中七「間を配る」。文政句帳（8・6）、中七以下「間を歩く川辺哉」。

解　昼食の馳走は鮓。鮓が馴れるまでまだ時間がある。その間しばらくお休みくださいと枕を配ってくれたのである。その家の夫人の心づかいであろう。

▼川島『新釈』に、「隙な男達のごろ〳〵して居た昔の床場かなぞの気分である。『鮓の出来る間横になつて話さうぢやないか』『よかろう』てなことで、順々に枕を配つて行く。ホイキタ、ホイと、受渡してゞも居るやうな、呑気なチヨン髷時代でなければ見られない図である」。伊藤『小林一茶集』に、「鮓が馴れるまで皆昼寝して待たうと言ふ趣向」。

老翁岩にこしかけて一軸をさづくる図に

我汝を待事ひさし時鳥

㊐七番日記（文化7・4。14・3、4）・魚淵あて書簡（文化14・4・3付）・おらが春・文政版発句集

▽七番日記（7・4）、前書なし。同（14・4）、前書「――さづける所」。

注「老翁岩にこしかけて一軸をさづくる図」、黄石公が下邳の橋で、長良に兵法の秘書を授けた事故（『史記』）を模した画。

解　この句、画賛である。黄石公が下邳の橋で長良との再会を待ったときのような気持で、汝の出現を待っていたのだ。ほとときすよ、の意。

▼勝峯『名句評釈』に、「この句は即ち張良が黄石公から兵法の一軸を授かる所の絵を句化したものであらう。『我汝を待事久し』は最初張良が遅参した時の黄石公の声色を描写したものである。『郭公』はその早暁の時刻と、『待つ』にかけて張良を象徴したのである。もとの話は夏の暁ではなく、無論郭公が鳴いたりしたのではないが、一茶は之を換骨脱胎（ママ）して、郭公を以てその時刻と、黄石公の待ちあぐんた気持と、張良の姿とを描き来つて、句調の強さといひ、此の場の情景といひ、実に緊密に描写して余蘊が無い。之は蕪村の此の種の名句に並べて少しも遜色のない逸句である」。勝峯『評釈おらが春』に、「画賛の句である。画中の人物をして我れと口を開かする意図が既に痛快である。我れは黄石公で画中の人物即ち老翁である。時鳥の張良であることも争へない。不生出の英雄とたまたま啼くに過ぎない時鳥をめづらしむ意を対比したのである。前書が我れと時鳥を黄石公と張良とにあてしめるのである。その前書を除くとも一句の独立性を失はない叙法が画賛の特徴である。その場合には無名の風流心ある老人が、時鳥の鳴き出るを待焦れてゐた事になる。汝と呼び棄てる尊大

さが、前書の有るなしに拘はらず、我れの人物を野趣あらしめてゐる」。川島『おらが春新解』に、「画賛の句である。『我』は黄石公である。『汝を待つこと久し』と、張良を叱りつけた語句をそのまま生かしている。『ほとゝぎす』は人材張良の比喩であることはもちろんであるが、一句独立させても、時鳥を待ちこがれる気持が出ている。（中略）一茶の画賛句はいずれも画面と不即不離の妙味を得ている。これによっても、一茶は生来の機智だけで作句していたのではなく、そのうしろには長い本格的修行の裏づけのあったことを思わせられる」。

是でこそ御時鳥まつに月

㊀　文政版発句集

▽　上五「是でこそ」は、「それでこそ」の誤りか。七番日記（文化9・3）・株番・随斎筆紀、上五「それでこそ」。

解　松の梢に清涼の月、遠くから時鳥の声、「これでこそ御鳥」と讃えられる、の意。

▼　川島『新釈』に、「句意は、松に月が出て居て非常に美はしい景色のところへ、折も折とて時鳥が啼いたので、眼前の景色は一層も二層も引立つて見えたといふので、これでこそ御時鳥だ、御時鳥様だと有難がつたのである。御時鳥の御の字に嘆賞の意をそつくり托したところがこの句の働きである。然し即興の言放しと見てこそ、言葉の綾で救はれる句であるが、私には左様も思へない。同じ作者の早い頃の作にも、『亀井天神宮』と題して、『御桜御梅の花松の月』といふのがあつて、其処から思付いて巧まれたものだと思ふ」。伊藤『小林一茶集』に、「松に月が出て時鳥の風情が始めて発揮された」。

這渡るはしの下よりほとゝぎす

㊀　七番日記（文化14・9）・八番日記（文政2・2、閏4＝重出）・おらが春・発句鈔追加

▽　八番日記（2・2、閏4）、前書「桟」。おらが春、前書「谷藤橋」。発句鈔追加、前書「公(谷)藤橋」。

解　藤蔓などを使った釣り橋がゆれるので、這って渡っていく。橋の下は深い谷である。その谷底のあたりから時鳥の声がしたというのである。橋を這って渡る人と、谷底から聞こえてくる時鳥の対比に眼目がある。ただし、享保十五年、不角に

同行した寿角が木曽の桟を渡ったときの句に「桟よ足の下タ成る沓手鳥（ほととぎす）」（『木曽の麻衣』）がある。

▼　勝峯『評釈おらが春』に、「藤蔓を括った吊り橋だから、その上を踏むと重みで揺れるはずである。（中略）臆病者でなくても橋の上で四ん這ひになりさうに思ふ。一茶も歩き掛けて半途で兵児垂れたのであらう、犬のやうに這った。その時、鋭い一ト声が橋の下で叫ぶ、時鳥である。橋の高さは時鳥が鳴きながら通り抜けるほどだから、下を覗けば眩暈（めまい）する険しさを持ってゐる。這ひ渡つて蹇（いざり）ではなかったのにと苦笑しつゝ、あの時鳥の一ト声が懐かしまれるのである」。「江戸の不角が享保十五年五月、木曽の桟に至つて、同行の寿角が『桟よ足の下タ成る沓手鳥』と詠み、不角は挿絵入りで、その紀行、木曽の麻衣その句を揚げてゐる。一茶の句は寿角に似て、然も『橋の下より』で大いに相違してゐる」〔考〕。川島『おらが春新解』に、「谷に架した藤蔓の橋とすれば、我が身の重さでゆらゆらして、通りなれた杣でもなければ立って歩けそうもない。そのかけはしを這いわたっている刹那に、ほととぎすが橋の下から鳴いた、つまり時鳥が橋の下を通り抜けたのである。（中略）『評釈』には、「享保十五年五月、江戸の不角が木曽のかけはしに至った時、同行の寿角の句『桟よ足の下タ成る沓手鳥』（木曽の麻衣）を紹介しているが、この種の句が一茶の記憶にあったのではなかろうか。景趣のすばらしい割合に実感が伴わない」。

時鳥俗な庵とさみするな

㊀　七番日記（文化11・4）・句稿消息・文政版発句集

注　「さみする」、みさげる。軽んじる。卑しめる。

解　わが家のあたりでは鳴こうとしない時鳥よ、そんなに私をみさげるな、の意。

ほとゝぎすなくや頭痛のぬけるほど

㊀　八番日記（文政2・2）

▽　八番日記（2・4）、中七「なけや頭痛の」。

解　時鳥がさかんに鳴いている。その「テッペンカケタカ」という鳴き声を耳にすると、頭痛もぬけてしまうほどだ、の意。

此雨にのつぴきならじ時鳥

㊐　七番日記（文化11・4）・希杖本句集

▽　句稿消息・稿本発句題叢・文政版発句集、上五「此雨は」。

解　時鳥も進退きわまったのだろう。この大雨では、その声も聞えない、の意。

せはしさを我にうつすな子規

㊐　句稿消息（文化10・10）・文政版発句集

▽　七番日記（文化10・4）、中七「人にうつすな」。

解　夜になっても「テッペンカケタカ、テッペンカケタカ」と鳴く時鳥よ、そのせわしなさを、私にはうつしてくれるな、の意。

▼　句稿消息、或美の評「隠者の境界さも有べし」。

鎮西八郎為朝人礫うつ所に

時鳥蠅むしめらもよつく聞け

㊐　おらが春・文政版発句集

解　「ほとゝぎすいかに鬼神もたしかに聞け」（梅翁宗因発句集）をふまえた、画賛の句。「我れこそは鎮西八郎為朝なるぞ」と、その名乗りの声が聞えよう。

▼川島『新釈』に、「芭蕉以前の談林調の皷吹者で、謡曲調を多く試みた宗因の作に『時鳥いかに鬼神も確かに聞け』といふのがある。これは謡曲田村末段『いかに鬼神もたしかに聞け』を其儘借用したものであるが、一茶の場合はたゞこの句から暗示を得て居るまでゞ、彼の縦横の才気は、殆ど原句の滓渣を留めて居ない。時鳥と蠅虫の取合せなり比喩なりが、軽妙を極めて居る。但、『蠅虫』といふ言葉は、私達に少し耳遠いやうに思はれる。此処では是非『蛆虫』と云ひたいが、『蠅虫』の方が当時の慣用であつたのか、それとも、一茶の用語上の潔癖から、蛆虫のやうに直接穢い感じを与へずに、然も小人輩を現すに適当した蠅虫といふ言葉を選んだのかも知れない」。勝峯『名句評釈』に、「一茶のこの句は又宗因のこの句（注、時鳥いかに鬼神も確かに聞け）から来ていることは疑もないが、一茶の換骨脱胎（ママ）の手腕は為朝が人礫を打つ象徴を背景として更に一歩進めてゐる。即ち万人に待望される時鳥が豪勇為朝で、投げ出される敵の多数は舞ふ虫の内でも殊に下賤蠅虫に比喩されているのだ」。勝峯『評釈おらが春』に、「大の男を手玉に取つて、摑むは、投げるはの為朝の武勇をたたへた句で、さうした画の賛にでも詠んだのであらう。蠅虫のやうにうるさく、たかつて来て弱いやつらである。汝らよ。よつく聞け。我こそは垣武天皇何代の後胤とでも名乗りをあげる画趣である」。川島『おらが春新解』に、「『ヤアヤア遠からん者はおとにも聞け、近くば寄つて目にも見よ』とほとんど俗言化している戦場の名乗りを利かせたのである」。

卯の花もちそうにさくか蜀魂

㊐　文政版発句集

▽　七番日記（文化13・5）、中七「馳走にちりぬ」。

解　時鳥をもてなすように、卯の花も今が盛り、の意。

先住のつけわたりなり閑古鳥

㊐　七番日記（文化12・4）・随斎筆紀・文政版発句集

注　「先住」、前任の住職。前住。「つけわたり」、建物などとともに受けついだもの、の意。

解　しきりにカッコウが鳴いている。これも代々の住職がこの寺とともに受けついできたものである、の意。

▼　川島『新釈』に、「『先住のつけわたり』は、前の住職からの伝承、即ち代々附き物の意で、おのづからなる山寺の幽寂境を、人事の方面から逆手に説明して居る。一茶の屢々試る描法である」。伊藤『小林一茶集』に、「前に住んで居た住持から庵の閑古鳥も一しよに譲られたものだと言ふ事」。

閑窓

吉日の卯月八日も閑古鳥

㊐　七番日記（文化11・4）・句稿消息・稿本発句題叢・希杖本句集・文政版発句集

▽　七番日記、前書「庵中」。句稿消息・発句題叢・前書なし。希杖本句集、前書「草庵」。

解　四月八日、花まつり（釈迦の降誕会）で寺院はにぎわっている。それなのに、わが俳諧寺にはたずねてくる者もない、の意。

▼　句稿消息、成美の評「吉日おもしろく候」。

高野山

地獄へは斯う参れとか閑古鳥

㊐　句稿消息（文化11）

▽　希杖本句集・文政版発句集、中七「斯う参れとや」。

解　高野山の奥の院参道であろうか。参道脇の木立の向うから閑古鳥の声が聞こえてくる。参道をはずれた所に、「地獄へ」

の道を思い合わせたのであろう。

前の世のおれがいとこか閑古鳥

㊐　七番日記（文化10・4）・志多良・文政版発句集

▽　七番日記、中七「おれがいとこか」「いとこ同士や」の両案併記。

解　閑古鳥がしきりに鳴いている。ひとりぼっちのさびしさは私も同じこと、前世では血を分ち合った者同士だったのだろうか、の意。

雲をはく口つきしたり蟇

㊐　おらが春・文政版発句集

解　じっと動きを止めていた蟇が、突然ぱくっと口を開けて、蚊などの小虫を吸い込む、その「口つき」を「雲をはく」ようなと、とらえた。「雲をはく」には、蟇の妖術にまつわる故事や民話の世界が感じられる。

▼　暉峻『鑑賞』に、「黒褐色で疣のある不気味な肢体、その緩漫な動作、湿っぽく暗いその居所、何一つ不気味でないものはありません。そのグロテクスな蟇が、口をぱっくりと上向きに開けて、喉を震はしてゐる様は、如何にも一茶のいふ通り、雲でも吐き出しさうであります」。勝峯『評釈おらが春』に、「蟇と睨みくらをするつもりで、その顔を気永に見守つてゐるがいゝ。ときには鯉の喰喝（けんかく）するやうに口の蓋をぱくりとあけて、すうつとそこらの蚊を吸ひ込むのが目撃されやう。俗に蟇口といふだけあつて、大きな口を顎まで開いたとしたら、一茶ならずとも『雲を吐く』感じを受けると思ふ。雲を吐いたその上には、呪印を結びつゝ自雷也が絵双紙のやうに現はれる、空想に魅せられもするであらう。『雲を吐く』が一茶の夢見る世界である」。川島『おらが春新解』に、「芝居では、大がまの吐く妖気に乗って自雷也が出現するのであるが、殊に草双紙の『自雷也豪傑物語』は、場所も信越に取り、発端自雷也が妙高山において蝦蟇の術を授けられるところから、後に黒姫山の大蛇丸の山塞を攻めるなど、すべて柏原辺から指呼の地に題材を求めている。今なお妙高の麓つばめ温泉附

近には、伝説にふさわしい陰森な個所が多くあるとも聞いた。この句の発想のうらには、それらのものがあると思われるが、それはそれとして、『雲を吐く口つき』には、どっしりとかまえこんだ大がまの風格があらわれている」。

目出たさは今年の蚊にも喰れけり

㊐　七番日記（文化13・3、4＝重出）・随斎筆紀・句稿消息・希杖本句集・文政版発句集

▽　七番日記（13・4）、上五「目出度〔さ〕は」。文化句帳（文化3・5）、中七「上総の蚊にも」。

解　めでたいことだ、生きながらえて今年の蚊にもさされることができたよ、の意。翌四月十四日、長男千太郎出生。五月十一日夭折。待望の我が子出生の直前、上五「目出たさは」に満足の感がこもっている。なお、同月の部には「わんぱくや縛られながらよぶ螢」「たのもしやてんつるてんの初袷」なども収めてある。

▼　勝峯『名句評釈』に、「五十一歳にして初めて郷里に落着き、五十二歳にして初めて妻を迎へ、五十四歳にして初めて子を儲けた一茶にとつては、永年の漂浪生活を静かに振返つて見る余裕が出来た頃だ。やれ〳〵目出たいことだ。今年も無事に夏を迎へることが出来た。『勿体なや昼寝して聞く田植唄』自分の様な泰平の逸民が、かうして今年の蚊に喰はれるまで、まあ息災で生きながらへて来たといふことは、思へば目出たい仕合である。と、かう感謝の念を自然の挨拶に驚きつつも、今更の如く繰返さねば居らぬ一茶であつた」。

蚊の声になれてすや〳〵寝る子哉

㊐　八番日記（文政2・4）・発句鈔追加

解　蚊の出はじめはむずかることが多かったこの子は、すっかり馴れてすやすやと眠っているよ、の意。この「子」は、六月二十一日に逝く長女のさとであろう。

宵越の豆腐明りに藪蚊かな

㊀ 板本発句題叢（文政3）・発句鈔追加

▽ 享和句帳（享和3・11）、中七以下「とふ(う)ふ明りや蚊のさはぐ(わ)」。稿本発句題叢・希杖本句集、座五「なく蚊哉」。

注 「豆腐明り」、「卯の花明り」などから連想した造語。

解 宵越しの豆腐が桶の中にほの白く見える。そのあたりからブーンという藪蚊の音が聞こえてくる。まだ薄暗い時間の厨であろう。

▼ 黒沢『研究』に、「卯の花明り、月明りに対して豆腐明りは実に一茶の面目躍如たる奇抜語であります。宵越の豆腐は昨日から取置きものです、小桶の中に入れてある豆腐の白さ――明りを慕ってその上に藪蚊が群れてゐるといふのであります」。暉峻『鑑賞』に、「これはまだ薄暗い夏の明方であります。（中略）そして場所は『藪蚊』から想像しても、田舎の旧家の厨、或は又奥深いお寺の庫裏などが適はしく思はれます。何うして其処にゐるのか分らないが、とにかく作者は明方の厨に居る。未だ物の形がはつきりしない薄暗の中で作者の目を捉へたものは、浮び上つたやうな豆腐の白さです。その時、晩の静寂を破つて闇える藪蚊のうなりも亦、豆腐の白さを中心に意識されたものです。『豆腐明り』といふ措辞も、『卯の花明り』などいふ和歌用語から思ひ付いた一茶の新造語で、奇抜でもあり、又極めて効果的ですが、それよりも、ものういう豆腐明りを通じて藪蚊のうなりをキヤツチした感覚の鋭さ、繊細さに、一茶の傑れた詩人的素質が窺へます」。